

## 「変毒為薬」の人生

先月、地元の自治会が主催する「敬老会」に出席しました。会場は小学校の体育館。今、私が所属しているシニアクラブ(老人会)の会員数は急速に増えつつあります。1300世帯あまりの団地で、60歳を超えた人が毎年、数十人誕生しているのに対して、新生児の誕生は一桁か、かろうじて二桁になる程度。団地ができて20余年。当団地も急ぎ足で少子高齢化の道を歩んでいるのです。

40年前に脚光を浴びた多摩ニュータウンが現在、高齢者団地と化して、注目が集まっていますが、今後、全国どこでも同じ状況が起こってくるのは必然の流れでしょう。

そのころ読んだ本『日本人の探求』(会田雄次著)では、「青年の国・日本」とのタイトルのもと、「15歳から59歳までの生産年齢人口の比率が日本は最も高い。アメリカは56%、日本は65%である」との記述があります。「青年の国」から「老年の国」へ。時代の流れに感慨を深くするところです。近々に総選挙も必至の情勢。まずは行政に、高齢者へのしっかりとした支援策を切望するものです。



その上で大事なことは、高齢者一人ひとりの生き方でしょう。セカンドライフをどう生きるか。人生80年から90年の時代に、退職後の人生は決して「余生」などではありません(「余生」などという言葉は「ヨセ!」なんて)。自分の意思のまま生きられる「もう一つの人生」が洋々と開かれているのです。

ではどうしたらよいのか? 私個人の体験を申し上げれば、定年7年を過ぎた今、「海外留学」から始めた来し方に心から満足しています。「残りの人生のための投資」との思いで、定年後すぐスペインに留学しました。妻と一緒に南スペイン・マラガでの生活は、わが人生のなかで最も充実した一年でした。そこで、ぜひ同じ世代の皆さんにも、との思いで『定年留学』してみませんか?—60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ—との本を出版したのです。

ところが、人生は思いもかけずに転変するものです。帰国後に私は一時、体調を崩しうつになってしまったのです。ようやく手に入れかけた仕事もすべてお断りしなければならない状況になってしまいました。前途は真っ暗。希望も消え、一時は自殺を考えるまで人生のどん底に落ち込んだのでした。

でもありがたいことに、うつはほぼ1年で快癒。その後はすべてを**変毒為薬**(「へんどくいやく」=仏教用語で「毒を変じて薬となす」との意)して、自分の経歴と境遇に最も合った仕事に就くことができ、予期以上の人生が開かれてきたのです。

まずは、シルバー人材センターで、駅前の自転車整理の仕事から始めました。なかには、「エッ! まさか君の経歴からしてそんなところで働くことはないだろう! ?」と声をかける人もいました。でも、他には仕事がなかったのです。自分も当初、恥ずかしいような気

持ちも心のどこかをかすめたのですが、「職業に貴賤なし」です。身体を動かすのは健康にも良いし、駐輪場で市民と第一線での触れ合いも刺激になります。

やがてこの仕事のほかに、インターネットに載せる都立高校の国際理解の教材の作成、英検受験者の指導にもあたるほか、3年前からは、かつての海外経験と語学を生かし、元の職場で、海外から来日するSGI (Soka Gakkai International)メンバーのアテンドなどにあたっています。

さらに今、シルバー人材センターでは、駐輪場のほか理事・広報部会長として、会報の編集も担当。ボランティア活動、また趣味のスポーツ等でも多忙の毎日です。そして、「世界文学紀行」を定年後のライフワークとして名作の舞台を訪ね歩いているところで、す。定年後に予想もしなかった人生のどん底を経験しましたが、結果的に人生の深みと広がりを得られたような気がします。詳細はちょうど1年前にアップした当HP「エッセイ・コラム」欄の「私の信仰体験」の後半部分で紹介していますのでご覧ください。ご参考になれば幸甚です。

私自身も、将来どんな状況が生じてくるかはわかりません。でも、人生の曲がり角に立った時、あの赤毛のアンのように、すべてを前向きにとらえ「必ず変毒為薬を」との思いを強くしているところです。

